

# 深くて暗い河はある…か

「夫婦善哉」が教える女と男

井口 幸久

私の好きな映画に「夫婦善哉」(東宝、1955年)がある。舞台は昭和初期の大阪。大店の息子・柳吉を森繁久彌、しつかり者の女房・蝶子を淡島千景が演じた。

蝶子は売れっ子芸者で結婚相手なら引く手あまただったが、選んだのはだめ男。ボンボン育ちで浪費ばかりの柳吉と駆け落ちし、苦労のしどおしである。柳吉は勘当され、当てにしていた財産も分けてもらえない。それでも蝶子は柳吉の世話を焼く。これが男と女の機微—おそらく日本人にしか分からない—というものだろうか。森繁は後に超大物俳優となり、演技の臭さが私には鼻につくのだが、この映画では実にいい。二人で法善寺境内の甘味屋「めおとせんざい」に行く。「頼りにしてまっせ、おぼはん」と柳吉が言い、蝶子が「おおきに」と答える。それがラストシーンである。

第二の定年をすぎ、私はすっかり濡れ落ち



葉。柳吉の心情に寄り添い、蝶子の偉大さが身に染みる日々であるが、気になるのは映画のタイトルだ。「めおと」に漢字を当てるとなれば「妻夫」だろう。女が先、男が後。「夫婦」となると男が先で女は後だ。めおとに夫婦の字をあてたのは原作者の織田作之助である。転倒した男と女の関係を描くという意味だったのかもしれない。

夫婦という言葉が一般化したのは戦後のことと言われる。私は何の違和感もなく日常会話でも新聞原稿でも、そのように使ってきた。夫婦。男が先で女が後。かつての「かみさん(神さん)」「奥さん」(家の奥の方にいる人)になったのも同じ流れにあるのかもしれない。

話は飛ぶがご容赦願いたい。「日本書紀」に記されたイザナギ、イザナミの神話ではオノコロ島に国柱を立てた二人が柱の周りを回って「いたしましよ」とイザナミが声を掛ける。「女から言ひ出すものではな」とイザナギがたしなめてやり直し、次は男の方が

ら「いたしましよ」と声を掛けて神々を生む。生まれたのが最高神のアマテラス(女性)他の神々である。男女の素朴な営み。そこに女性に対する蔑視や差別は感じられない。キリスト教では、女は男の骨から作られ蛇に騙されて禁断の木の実を食べてエデンの園から追放される。パンドラの箱を開けたのも女である。女は男の所有物であるとする宗教宗派さえある。横たわるのは男VS女という対立構図であろう。

右と左、善と悪、貧者と富者、多数者と少数者…。複雑に入り組んだ対立の中で、考え方や立ち位置を明確にし、自立した「個」として生きること。それを近代的自我の確立と呼ぶ。問題が個人の内に留まるならばそれでもいい。しかし、企業、組織、はては国家まで、集団の立ち位置、進路を決める際に多数決を

いのちゆきひさ 1956年生まれ。元西日本新聞記者。同社論説副委員長、文化部長、佐賀総局長など歴任。著書に「介護タクシーを知っていますか」「陸オカ」に上がって記者になる」など。福岡市。

用いるとすれば問題が残る。負けた側は「次は逆転してやろう」と念じ、勝った側も身構え、社会の分断が進む。



いまアメリカでは、性的少数者の人権という観点からトイレや風呂、更衣室などに男女の別を設けてはならないという。スポーツの女子競技もトランスジェンダーを受け入れねばならない。人間は自分の性を自身で選択することができる。小学生からそのように教育する州もある。一方で、神から与えられた性を人間が恣意的に決めることはできないとする人々も多い。対立は根深い。対岸の火事ではない。この先どんな社会になるのか、私は不安だ。わが家の「蝶子殿」に意見を聞いた。

「この国に男尊女卑がないと思っているの？ 理屈はどうあれ、厳然としてあるよ。特に田舎はね」

私とは前提が違う。そして不安がる様子もない。男と女の間には深くて暗い河があるらしい。得体のしれない何か。私はその何が嫌いではない。



「夫婦善哉」DVD発売中 4950円  
発売・販売元—東宝  
©1955 TOHO CO.,LTD.